

ルカによる福音書21章1-4節 「やもめの献金」

1A 神殿における献金 1

1B 主の命令

1C 主の贖い

2C 礼拝と交わり

3C 共同体

1D 奉仕者

2D 貧しい人

2B 金持ちの献金

2A 困窮するやもめ 2

1B レプタ銅貨

2B イエスの目

3A イエスの評価 3-4

1B 誰よりも多く献げた者 3

2B 犠牲のともなう献金 4

1C 自発的な献げ物

2C 信仰の献げ物

3C 貧しさにある祝福

本文

ルカによる福音書 21 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、20 章まで来ました。今朝は、続き、21 章 1-4 節をじっくりと見たいと思います。それから午後礼拝で 5 節以降を見たいと思います。

1 イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。2 そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、3 こう言われた。「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。4 あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」

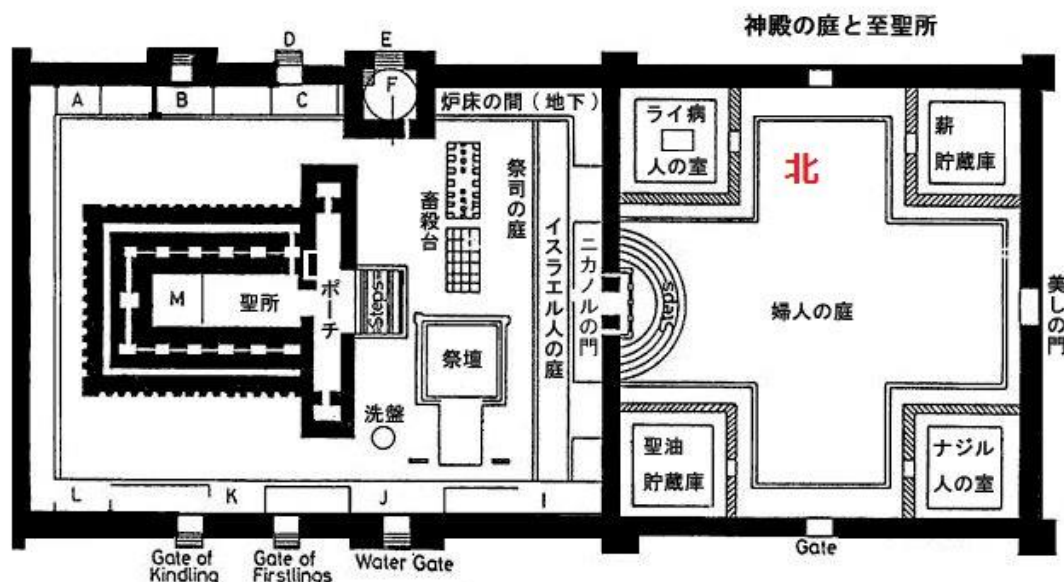
今、イエス様は、神殿の境内におられます。イエス様は、そこで御言葉を教え、福音を宣べ伝えておられました。そこに、神殿を管理している祭司長たちや、律法学者たち、長老たちがやってきました。そこでイエス様を尋問しましたが、かえってイエス様が彼らに問い質す形となりました。

そしてイエス様は弟子たちに、語られます。彼らの行っていることには用心しなさいということですから。「20:46-47 律法学者たちには用心しなさい。彼らは長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場であいさつされることや会堂の上席、宴会の上座を好みます。また、やもめの家を食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けるのです。」律法学者たちが、宗教をやっている者として尊敬を受けていましたが、心の中では人に見られるように、人から自分は霊的なものなのだと見られるために行っていることであるとご指摘されました。さらに、やもめの家を食い尽くす、と言われていました。やもめは、単なる未亡人ではありません。当時、福祉制度のない社会では、乞食寸前の存在です。そういう人たちに、施しをしなければいけないという神の律法があるのに、施しませんでした。また、当時 20-30%と言われる献金を要求していたのかもしれませんが。このようなことで、より厳しい裁きを受けるのだと警告しておられます。

私たちが今、読んだところは、そのように困窮し、人々からも巻き上げられていたような弱く、脆いやもめが、なんと献金をしに来たという箇所です。ここから、私たちは主に献げることが、どういふことなのかを学ぶことができます。イエス様が高く評価されたところにある、神の知恵を知りたいと願います。

1A 神殿における献金 1

イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。¹



神殿の敷地は、いくつかの区画に別れていますが、中に入ると「異邦人の庭」と呼ばれる外庭があります。異邦人でもそこまでは入ることができます。そこでおそらく、イエス様はみことばを教

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E7%A5%9E%E6%AE%BF%E5%B4%A9%E5%A3%8A%E3%81%AE%E4%BA%88%E5%91%8A%E3%81%A8%E7%B5%82%E6%9C%AB%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E6%95%99%E3%81%88>

えておられたと思われます。宗教指導者たちとの議論が終わり、神殿そのものに入りますが、手前に「婦人の庭」というものがあります。そこに献金箱があったようで、誰でも見ることのできる公の場に置かれていたようです。そこに、他の福音書を見ますと、その献金箱を向かいにして座っておられました。金持ちたちが献金を投げ入れているとありますが、先の律法学者や祭司長、長老たちのような人々がその中にいることでしょう。

1B 主の命令

私たちは、礼拝の中で献金の時間を持っています。これは、単に教会運営のための便宜上、そうしているではありません。教会員になるための会費ではありません。神殿で献金をしていますが、これは主が、イスラエルの民に対して命じておられることを、同じように、教会にも命じておられることだからです。

1C 主の贖い

神が人と関わるようになってから、その恵みによって人々に近づいてくださる時、人は応答として、献げ物をしてきました。ノアは、洪水が終わって箱舟から出た時に、全焼のいけにえを献げました。そしてアブラハムが、ロトを救出した後に、サレムの王メルキデゼクが出て来て、彼に対してアブラハムは、「すべての物の十分の一を彼に与えた」とあります(創世 14:20)。

そしてイスラエルは、エジプトで奴隷状態でしたが、神がエジプトの長子を打たれた時に、イスラエルに対してはこう言われました。「出 13:1-2 【主】はモーセに告げられた。「イスラエルの子らの間で最初に胎を開く長子はみな、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それは、わたしのものである。」主ご自身が、イスラエルをご自分の子のようにして救い出し、ご自分のものとしてくださいました。それゆえ、主は初めに生まれる男の子、人間であれ、家畜であり、長子あるいは初子をわたしに献げなさいと命じました。主に献げる最も大きな理由は、主が、イスラエル人をご自分の所有の民とされたということです。主が代価を払って買い取られたということ、献げ物を通して受け入れるということです。

私たちキリスト者も、代価をもって買い取られました。キリストの命が代価で、私たちは神のものとなりました。それでパウロは言います。「I コリ 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」ですから、なぜ私たちが献げ物をするのか？どうして献金をするのか？その初めの答えは、「救われたから」であります。

2C 礼拝と交わり

そして次に、なぜ献げ物をするのか？「礼拝と交わりのため」であります。神を礼拝するということは、神を王としてひれ伏すことです。東方の博士が、ユダヤ人の王を拝みに参りましたと言って、ベツレヘムの幼子イエス様に、黄金、乳香、没薬を献げましたね？それと同じであり、私たちはサ

タンの中で、罪のために、自分の欲のために自分自身を捧げていたところから、神に愛されたキリストの御国の中に移されたのです。自分の喜びのために献げる人生から、神の喜びのために献げる人生に変えられたのです。ですから、自分の持っている物をもって神を礼拝します。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

私たちは、神が御子を私たちに下さったというところで、交わりを求めておられます。ですから、私たちが自分の命にまさって、神をあがめるところに真実の交わりがあります。使徒ヨハネは、「Iヨハ 1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」と言いました。その交わりの中にいるのですから、私たち自身がキリストを第一にして、何物にもまさってこの方を愛する時に、そこに真実の愛と交わりがあります。

3C 共同体

そして、その献げられたものは、どうするのか？神を礼拝し、神を宣べ伝えるために使っていきます。イスラエルの民は、エジプトから出て行く時に、エジプト人から金銀を受け取りなさいと命じられました。奴隷の身であった彼らは何も持っていませんでしたが、そうしなさいと命じられたのです。それは、神が住まれる幕屋を造るためです。そこには、契約の箱、宥めの蓋、臨在のパンの机、燭台、香壇、金が使われていました。また銀も使われ、青銅も使われ、燃糸としての繊維類も必要でした。そうやって、主を礼拝する時に具体的に必要なものを、主に献げることになります。

1D 奉仕者

そして、イスラエルの共同体では、レビ人という奉仕者がいました。アロンの直系は祭司として主に仕えますが、その他に幕屋の用具の運搬など、レビ人が幕屋についてのことを奉仕しました。ソロモンが神殿を立ててからは、神殿に来る礼拝者の通る門で、門衛をしたり、神殿の中で賛美の歌を奏でる、歌うたいの奉仕もしていました。そうした奉仕に専念しているので、イスラエル人の献げる十分の一を受け取るように定められていました(民 18:24)。それから、イスラエル人は、取れた収穫は十分の一を捧げるようになっていきます(レビ 27:30)。家畜も、羊十匹のうち、一匹を献げるように命じています。

今、教会は、全ての人が主に対する祭司であり、私たち自身が聖霊の宮であり、神殿であることを新約聖書は教えています。イスラエルの共同体とは違いますが、それでもその原則は教会にも受け継がれており、イエス様は十分の一について、こう言われていますね。「マタ 23:23 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならぬことだ。」私たちの教会が礼拝をし、ま

た福音宣教の働きをしていくことのために十分の一を献げることは、おろそかにしてはいけな
イエス様は命じられます。

そして、指導者に対しては物質的にも助けるべきであることを使徒たちは教えています。「Ⅰテモ
5:17-18 よく指導している長老は、二倍の尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教え
のために労苦している長老は特にそうです。聖書に「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならな
い」、また「働く者が報酬を受けるのは当然である」と言われているからです。」

2D 貧しい人

そして分け与えるということについては、イスラエル人たちは貧しい人たちに施すことを主から命
じられています。それもまた教会にも与えられている命令であり、一人一人がしっかりと働いて、そ
の働いたものから、分け与えなさいということ了新約聖書では教えています。「エペ 4:28 盗みをし
ている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい
仕事をし、労苦して働きなさい。」

2B 金持ちの献金

こうやって、神殿にてどうして献金が捧げられているのかが、お分かりになったかと思います。し
かし、ここでは金持ちが献金を捧げているのをイエス様が観察しておられます。ここでの問題は、
イエス様が語られたように「見せるために献げていた」ということです。マタイ 6 章、山上の説教で
こう言われました。「マタ 6:2-3 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会
堂や通りでするように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言いま
す。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。あなたが施しをするときは、右の手がしている
ことを左の手に知られないようにしなさい。」人々に良い印象を与えるための献金は意味がありま
せん。献金というのは、あくまでも神に対して行うものであり、神と一人一人との間のものです。

そして、他の箇所では、「分け与える人は惜しまずに分け与え」なさいと命じられています(ロー
マ 12:8)。惜しまずに、というのは、「ひも付きではないように」と言い換えることができるかもしれま
せん。純粹に、そして素直に神に対して献げるのであって、「献げ物をしたのだから、これだけの
見返りがほしい」であるとか、献げた物ことについて条件を付けることはあってはいけません。献
金は、祈って、自分に与えられた収入の一部を初めに神のために分けて、それで神に献げるもの
で、その後は主のなされることに任せます。

2A 困窮するやもめ 2

ところが、対照的な人、やもめが献げ物をします。2 そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ
銅貨を二枚投げ入れるのを見て、3a こう言われた。・・

1B レプタ銅貨

説明しましたが、やもめを今の感覚で読んではいけません。単なる未亡人ではないです。聖書には、乞食にほとんど近い、非常に困窮している人として、やもめが登場します。「出エ 22:22-24 やもめ、みなしごはみな、苦しめてはならない。もしも、あなたがその人たちを苦しめ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶことがあれば、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。そして、わたしの怒りは燃え上がり、わたしは剣によってあなたがたを殺す。あなたがたの妻はやもめとなり、あなたがたの子どもはみなしごとなる。」そして教会でも、テモテ第一で、本当のやもめを助けなさいという勧めをパウロが行っていて、新約の時代にもやもめは困窮していたことが分かります。

すごいのは、それでも彼女が献げたということです。しばしば、「お金がないから、献げることができない」という話をよく聞きます。けれども、主は持っていない者を献げなさいとは命じておられません。レビ記において、全焼のいけにえで、牛や羊を献げる余裕がない人は家鳩を捧げなさいと言われている箇所があり、事実、ヨセフとマリアがエルサレムの神殿に来た時に、家鳩を捧げました。なぜなら、献げることは本人が神のものになっていること、また、礼拝していることそのものだからです。もちろん、先に読んだように、献金よりも憐れみや正義、誠実が優先されます。しかし、献げるということは貧しいことが理由とはならないのです。

2B イエスの目

そして、イエス様がこの様子を見ておられましたね。イエス様は、全ての人のことを見ておられます。人目にはだれも分からないことも、全てを見ておられます。私がかかりしている時に、私を教えてくれた牧師は、ヘブル書 6 章 10 節を送ってくれました。「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。」迫害のために貧しくなっているスミルナの教会の人たちに対して、イエス様は、「黙 2:9 わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。」と言われました。貧しくとも、信仰において富んでいる、ということです。

3A イエスの評価 3-4

1B 誰よりも多く献げた者 3

3b「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。

これは、驚くべきことです。今、スミルナの教会に対するイエス様のことばのように、貧しいのに、富んでいると評価されるのです。私たちが相当、人間の見方から目を離して、イエス様の目で見えていく訓練が必要です。これを聞いた、弟子たちも驚いたのではないのでしょうか？彼女が献げたレプタ銅貨ですが、一日の労賃の 128 分の一なのだそうです。ローマの通貨で最小の単位です。ですから今のお金に換算すると、百数十円ではないのでしょうか？それを、「だれよりも多くを投げ入れました」と評価されているのです。

私は、先週、フェイスブックを見ていて、二つの世界を見ていました。どちらもアメリカが関わっていることですが、一つはシリア情勢です。そこに、私たちの仲間、カルバリーチャペル沖縄の元副牧師でもあるケビンさんが赴いています。トルコがシリアに侵攻して、そこからシリアのキリスト教徒やクルド人が一斉に逃げています。そういった人々に、治療を施し、寝具や食料を提供しています。そしてもう一つは、アメリカではとてつもなく有名なミュージシャン、カニエ・ウェストという人がクリスチャンになったということで、本当の回心なのかどうか議論するような話です。私は、目が回りそうになりました。カニエ・ウェストの話ばかりで、今、窮地の中にいるシリアのクリスチャンたちのことは、ほとんど語られていません。けれども、思いました。その一人の大金持ちの、有名人が救われたことは喜ばしいことですが、神の目は苦しんでいる、死にそうになっている大勢のクリスチャンたちに目を向けているだろうと。けれども、目立つほうに、富んでいるほうに目が向く流れに抗うのは、結構大変です。主が見ておられるように見るのは、訓練が必要です。

2B 犠牲のともなう献金 4

4 あの人はみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。

ここに献金のエッセンス、真髓が隠されています。先ほど、献金は礼拝の一部とお話しました。ですから、次のことがなければ意味がありません、「犠牲」です。主が受け入れられた献げ物には、犠牲がともなっていました。アベルが主に捧げた羊は、肥えたものであり、初子でした。ダビデが罪を犯して、その赦しのために、後に神殿の敷地になるモリヤ山に行き、そこで祭壇でいけにえを捧げようとしていました。そこは、エブス人のアウラナという人の打ち場だったのです。アウラナは「すべて差し上げます」と言ったのですが、こうあります。「Ⅱサム 24:24 しかし王はアラウナに言った。「いや、私は代金を払って、あなたから買いたい。費用もかけずに、私の神、【主】に全焼のささげ物を献げたくはない。」そしてダビデは、打ち場と牛を銀五十シケルで買った。」こうした犠牲的行為によって表れます。

1C 自発的な献げ物

このような犠牲は、自発的なものでなければいけません。イスラエルの民は、自ら進んで献げる物であるとして、献げ物が定められていました。レビ記にも、自ら進んでと言う言葉が並びます。罪のためのいけにえは、しなければいけないもの、選択肢がないですが、その外は、自発的なものであります。そうでなければ、真実な意味で犠牲とならないからです。愛による犠牲でなければ、意味がないのです。パウロは、こう言いました。「Ⅱコリ 9:7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」喜んで与える、というのは、「笑っちゃうぐらいに嬉しくて」という意味です！献金が、大きな喜びとして献げるようなものなのですね。賛美を喜びをもって捧げますね、同じ原則です。

2C 信仰の献げ物

そして、信仰によって献げます。犠牲を払うのですから、人間的な計算によれば、到底、自分の生活の必要はどうすればよいか、分からないということになります。けれども、献げることによって、かえって必要が満たされるという世界があります。パウロが、何度となく献金を送ってくれたピリピの教会の人々に、こう言いました。「ピリ 4:19 また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」

3C 貧しさにある祝福

そして、貧しさの中からも献げた、というところに、イエス様がやもめについて語られたように、そこには愛があり真実があり、霊的な豊かさがあるのです。コリントの教会の人たちに対してパウロが話しました。「Ⅱコリ 8:1-4 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思えます。彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。私は証します。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。」奉仕の恵みというのが、献金のことです。主は、熱心に献げることが、恵みにあずかっていることであるとしておられます。神の恵みは、私たちは受動的であれば、いつまでも分かりません。積極果敢に取り組む時、そこに恵みがあります。